

あと、地方を統治し、強制する権利、あるいはむしろいっさいの主張を、放棄する旨を宣言すること。

すべての州、コミューン、組合に、首都の例にならってまず自らを革命的に再組織し、ついであらかじめ取り決められた結合地点に、強制委任を受け、責任を負い、解任可能な代表を派遣し、蜂起した組合、市町村、州の連合を同じ原理のもとに結成し、反動に打ち勝ちうる革命勢力を組織するように訴えること。すべての州およびコミューン、とりわけ原理やならぬ独裁の法令によってではなく、ただ革命の事実によって、すなわち国家の法的・公的生活の完全な停止がすべてのコミューンに必ずやひき起こすはずの結果によってのみ、革命的となる農民の間に、なんらかの肩章を帯びた公的な革命委員ではなく革命宣伝員を派遣すること。

同一の原理原則の名で蜂起した外国、州、コミューン、組合または個々の個人さえもが、異なる政治または国家体制に属するにせよ、現在の国境を顧慮せず革命連合の中に受け入れられ、反動にくみする自国の州、コミューン、組合、個人はそれから排除されるであろうという意味で、いぜんとして国民的である国家の廃止。それゆえ、国境の廃止と国家の崩壊を基礎とする革命の普遍性が勝利をおさめるのは、蜂起した諸国の相互防衛のための革命の溢出と組織化という事実そのものによってである。

政治革命が社会革命に転化し、国民革命がまさにその

根本的に社会主義的な、国家破壊的な性格によって普遍的革命になるのであれば、もはや勝利ある政治革命も国民革命も存在しない。

革命はどこでも民衆によって行なわれ、その最高の指導はいつも農業生産組合と工業生産組合の自由な連合体に組織された民衆に存するべきであって、古い境界と民族の別を考慮せず、同一の原理によって蜂起したすべての国々を網羅し、革命的代表的な方法により、下から上に自らを組織する新しい革命国家の目的とするものは、公益事業の管理であり、諸国民の統治ではないはずである。それは、新しい祖国、すべての反動の同盟に対抗する世界的革命同盟を構成するであろう。

この組織は、独裁と後見的指導権力とのいっさいの觀念を排除する。しかし、この革命同盟の結成自体と反動に対する革命勝利のためには、革命の生命そのものおよびそのすべての精力を構成する民衆のアナキーの内部で、思想と革命行動との統一が、一つの機関を見出すことが必要である。この機関たるべきものが、「国際兄弟の秘密な世界的協会」である。

この協会は、革命は決して個々人によっても、秘密結社によってもなされないという確信から出発する。革命は、あたかもひとりで行なわれ、事の勢いにより、事件と事実の動きによってひき起こされる。革命は長い間にわたって一般民衆の本能的意識の奥底で準備され、ついではしばとるにたらぬ原因に一見刺激され

て爆発する。正しく組織された社会がなしうるすべては、まず大衆の間に彼らの本能に対応する觀念をひろめることによって革命の生起を助成し、革命の軍隊ではなく——軍隊はつねに民衆でなければならない——一種の革命参謀本部を組織することであり、これは、献身的・精力的・知的な、とりわけ民衆の真の友であって野心や虚栄心が強くなく、革命的理念と民衆の本能との仲介者として役立ちうる人々から構成される。

したがってこの人々の数は龐大であるべきではない。全ヨーロッパの国際組織には、堅く本気に手を結んだ革命家百名で十分である。どんなに大きな国の組織にも二、三百名程度の革命家で足りるのである。

マルクスとの論争

これまでのテキストでは、「マルクス主義者たち」の政治的構想に関しては暗にそれとほめかしてはいるが、関与する者の誰の名もそこに示していない。第一インターナショナル内部でのバクーニンとマルクスとの関係が本当に悪くなったのは、当初ごく慎重に労働者の発言を認めていたマルクスが、インターナショナルの思慮深い助言者、隠れた頭脳という役割を放棄して、その組織を自己の「権威主義的」および反アナキスト的な政治的傾向のために公然と押収しようと企てた一八七〇年以後のことであった。この時以来マルクスは、バクーニンの周囲に集まるリベテル派社会主義者とあからさまな闘争に入った。この闘争は、一八七二年ハーグ大会のさい、インターナショナル内部の分裂に帰着したが、この分裂は、マルクスがことさらにたくらみ、バクーニン派に最終有罪宣告を下し、追放しようとしたものであった。

I ハーグの破門

ブリュッセルの『ラ・リベテル』誌への手紙

一八七二年十月五日、チューリッヒ

編集者諸君

諸君は、ハーグのマルクス主義者大会が私に対して下した破門宣告を発表したあと、私の回答をも発表することを公正とお認めではなからうか？　これがその回答である。

マルクスとその派の勝利は完全であった。彼らマルクス主義者たちは、彼らの言説にはかくも頻繁に見出されるが、彼らの行動ではめったに認められない、道徳・真理・正義の原理を大いに尊重してではなく、長期にわたりはなほだ巧妙かつ入念に準備し組織したすえ多数派となつたことに確信をいだき、その仮面を脱いだ。そして権力を愛好する連中にはふさわしく、こんごは大衆政治へのあらゆる主張の足場に役立つであろう人民主権をつねに名目として、彼らは図々しくもインターナショナルに加わる民衆の奴隸制を決定したのである。

もしもインターナショナルがこれほど根強くなかったなら、もしもそれが、彼らが想像するように、指導的中枢の組織のみを基礎とし、文明世界のすべての国のプロレタリアの利害と実質的熱望との真の連帯や、あらゆる政府中心主義の後見から独立した、労働者の各セクションと各連合との自発・自由な連合組織を基礎としていなかったならば、マルクス主義者たちの理論と実践との過度に好意的かつ忠実な具体化である、この不吉なハーグ大会の決定は、インターナショナルを死滅させるに十分であつたらう。またそれは、その創立にはマルクス氏

が、私は好んで確言するが、精力的かつ知的な役割を果たしたこのすばらしい協会を、同時に滑稽にして醜悪なものにしたであらう。

国家、政府、全般的独裁！　グレゴリー七世（一〇七三—一〇八五）
マティウス八世（一〇九四—一一一三）
五世（一〇一五—一〇五五）
およびナポレオンのごとき人々の夢が、新しい形で、だがつねに同じ口実をもって社会主義的民主主義の陣営に再現している！　人はこれ以上滑稽な、しかしまたこれ以上言語道断な何かを考へうるであらうか？

一群の人々が、この上もなく知能ある善意の人たちであるにせよ、すべての国のプロレタリアートの革命運動と経済組織との思想、魂、指導的・統一的意志となりうる主張するのは、常識と歴史的経験とに反する邪説であり、マルクス氏のごとき聡明な人がどうしてそのような考えをいだいたのか、驚くとともに不審である。

教皇たちは少なくとも、彼らが聖霊の恩寵によって把持すると称し、それを信じているとみなされた絶対的な真理をいいわけにした。マルクス氏にはこのようないいわけは何もないし、私は、氏が絶対的真理に近づく何かを科学的に考へ出したと思ひこんでいるものと考えても、氏を侮辱したことにはならないであらう。しかし絶対的なものが存在しなくなるやいなや、インターナショナルには無謬のドグマも、したがって公認の政治的または経済的理論もありえないし、われわれの大会は、す

べての支持者と信奉者に強制的な原理・原則を布告する万国公会議（（教皇のもとに開かれる全））の役割を意図すべきではないのである。

インターナショナルのすべてのメンバー、個人、支部、連合にとって真に義務であり、インターナショナルの真実の、唯一の基礎をなす原則は、ただ一つしか存在しない。それは、この原則のあらゆる発展、あらゆる帰結と適用とをつうじ、すべての職業、すべての国の労働者が、労働の搾取者に対する彼らの経済闘争において国際的連帯を果たすことである。インターナショナルの真の生きた統一がもつばら存するのは、この連帯の現実的組織においてであり、労働者大衆の自発的活動によってであり、すべての言語とすべての国の労働者大衆の無制限に自由な、自由であるだけにいつそう強力な連合によってである。

ブルジョアジーの搾取に対するプロレタリアートの戦闘的連帯のこのいよいよ大いなる組織から、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの政治闘争が生起すべきであり、現に生起していることを疑う者がありえようか？　マルクス派もわれわれもこの点では一致する。しかしわれわれをマルクス派から根本的に引き離す問題が直ちに起こってくる。

われわれは、プロレタリアートの必然的に革命的な政策は、国家の破壊を即時かつ唯一の目標としなければならないと考える。われわれは、大帝王や教皇たちのよう

に、普遍的國家すなわち普遍的奴隸制を夢見るのでないとしたら、國家を保持しながら國際的連帯を語りうるとは認めない。國家は本質そのものからしてこの連帯の破壊であり、したがって戦争の恒久的な原因であるからだ。われわれはもはや國家の中で、また國家をおしよるプロレタリアートの自由や大衆の現実的解放を語りうるとは考えない。國家とは支配を意味し、支配はすべて大衆の屈従と、したがってなんらかの支配的少数者のためにする大衆の搾取を前提とするのである。

われわれは、革命的過渡としてすら、國民公會も憲法議會も臨時政府も、いわゆる革命的獨裁も認めない。なぜなら革命は、大衆の中であつてしか眞実、誠実、現実のものでなく、若干の支配者の手中に集中されるときは、不可避免的に、かつたちまちに、反動となるからである。これがわれわれの信念であるが、いまはこれを詳述する時ではない。マルクス派はまったく反対の考えを主張している。善良なドイツ人にはふさわしいように、彼らは國家權力の崇拜者であり、したがってまた政治的・社会的規律の予言者、上から下への既成秩序の擁護者であり、これをつねに普通選挙と大衆主権との名で行ない、これに対して人々に残されるのは幸福と、指導者、選ばれた支配者に服従する名譽とである。マルクス派は、彼らがいわゆる人民國家（Volkstaat）に期待する以外の解放を少しも認めない。彼らは愛國主義の敵ではほとんどないため、彼らのインターナショナルリズムはあ

まりにも多くのばあい、汎ゲルマニズムの色彩を帯びている。むしろ、ビスマルクの政策とマルクス派の政策との間にもきわめて著しい差異があるが、マルクス派とわれわれとの間には深淵が存在する。彼らは政府中心主義者であり、われわれはやはりアナキストなのだ。

これが、今日インターナショナルを二つの陣営に分裂させている二つの主な傾向である。一方には、適切に言えばドイツのみが存在する。他方には、さまざまな度合いでイタリア、スペイン、スイス・ジュラ、フランスの大部分、ベルギー、オランダがあり、ごく近い将来にスラヴの人々も加わるであろう。これら二つの傾向はハーグ大会で衝突し、マルクス氏のすこぶる巧妙な手腕と、この最終大会のまったく人為的な組織立てのおかげで、ドイツの傾向が勝をおさめたのである。

これは厄介な問題が解決したということであろうか？問題は確に論議されさえしなかったのだ。多数派は、みごとに訓練された連隊のごとく投票して、その票決のもとに二つの討議を粉砕したのである。かくして対立は、従前にもまして強くまた険悪になっている。マルクス氏自身、勝利のあらゆる陶醉にもかかわらず、おそらく対立からごく安撫に免れたとは思っていない。時にそうした愚かな希望をいだくことがあるにしても、ジュラ、スペイン、ベルギーおよびオランダ（あまりにも明らかに偽造されたこの大会に代議員をおくることをいさぎよしとさえしなかったイタリアはいうまでもなく）の

代議員の連帯的な抗議、形式的にはごく穏やかだが、根本においてはそれだけに力強く意味深い抗議は彼を覚醒させたにちがいないかった。

この抗議自体は明らかに、社会革命の原理と情熱が真に浸透したすべての国々に起ころうとしている猛烈な反抗の、ごく力強い前触れにすぎない。しかもこうした動揺はすべて、政治的問題をインターナショナルの基礎、義務的な原理たらしめようとするマルクス派のあのような不幸な偏見によって喚起されたものである。

実際、上記の二つの傾向の間には、いかなる和解も今や可能ではない。ただ社会革命と大いなる歴史経験の実践や出来事の論理が、それら傾向を早晩共通の解決に立ち戻らせることができるであろう。そしてわれわれは、自己の原理の正当なことを固く信じながら、そのときドイツ人みずからが、彼らの支配者ではなく労働者が、ついにわれわれに協力して、国家と呼ぶ民衆の牢獄を破壊し、実際には大衆を支配し食い尽くす術ではない政治を非とするであろうことを、信ずるものである。

だが、今は何をなすべきなのか？ 今日政治的地盤での解決と和解は不可能であるため、互いに寛容し合い、各国に、有利と思われ、あるいはその特殊な事情に最もよく応じた傾向に従う異論の余地ない権利を認めることが必要である。したがってインターナショナルの強制的綱領のすべての政治的問題を排除して、もっぱら経済的連帯の地盤に立つこの大々的な協会の統一を求めること

が必要である。この連帯はわれわれを結合するのに、政治問題は宿命的にわれわれを分裂させるのである。

汎ゲルマニズムの歴史的敵対者であるイタリア、スペイン、ジュラ、フランス、ベルギー、オランダの人々もスラヴ人たちも、またイギリスとアメリカのプロレタリアートまでも、今日ドイツのプロレタリアートに彼らの指導者の野心が押しつける政治的傾向には、決して従わないであろう。だがこの不服従の結果、新総務委員会がこれら国々すべての権利を停止し、マルクス派の公会議的な新委員会がそれら国々を破門し、インターナショナル内部からの追放を宣言したと想定しても、それらの国のプロレタリアートの間に必然的、自然的に、また事実上存在する経済的連帯が、そのために減少するであろうか？

ドイツの労働者がストライキをするにせよ、彼らが雇主の経済的圧制に反抗するにせよ、あるいは資本家およびその他民衆の労働の搾取者たちの政治的暴圧に対して反乱を起こすにせよ、これら国々のプロレタリアートは、手を携ぎこの闘争の傍観者としてとどまるであろうか？ いな、彼らはドイツの兄弟たちに、その解放を求めるべき政治体制がいかなるものであるかをあらかじめ問うこともせず、乏しい金銭をすべて提供し、さらに血のすべてをも与えるであろう。

したがってここにこそ、インターナショナルの真の統一が存するのだ。それは、すべての国々の一般民衆の共

通の渴望と自発的運動とのうちに存するのであって、いかなる政府にも、大会が一般民衆に押しつける統一的政治理論にも存しないのである。

このことはまったく明白であり、それを理解させまいとするためには、権力への情念によって盲目にされる必要がある。

厳密に考えれば、王冠を戴きあるいは戴いていない専制君主が、全世界の王位につくのを夢みることもあろう。しかし、プロレタリアートの友、大衆の解放を真に欲しているとする革命家、またいくつもの国々に勃発すべき革命運動のすべてにおける指導者、最高の審判者をもつて自任しながら、これら国々すべてのプロレタリアートを、自分の頭の中で孵化した唯一の思想に従わせようと考えている者については、何といったらよいのか？

私の考えではマルクス氏は、いつもそうではないにせよ、きわめてまじめな革命家であり、実際に大衆の蜂起を欲している。しかも彼が、全般的、集団的もしくは個人的独裁、機械を操るようすべての国々の大衆の蜂起運動を規制し指揮する、世界革命のいわば技師長のような仕事をする独裁、そのような独裁を打ち建てることはそれだけで革命を圧殺し、あらゆる民衆運動を麻痺させ誤らせるに十分なことを、どうして認めないのか、不審である。その天分がいかに偉大であるにせよ、己れのみが、各国、各州、各地方、各職業によってきわめて多様で、かつ共通の巨大な渴望とこんご大衆の意識に移され

るであらういくつかの基本的原理によって、統一されているが画一化されてはいないその無限の全体が、将来の社会革命を構成するような、限りもなく多数の利害、傾向および行動を燃えたたせ、また理解することができると誇る者は、何びとであり、どのような人々の集団なのか？

また、この革命のいわゆる利益のために、全文明世界のプロレタリアートに、いわゆる公認の、そのじつ作為の多数票によって絶対的真理にすり変えられたマルクス氏自身の思想でしかない原理の名で、地方的連合を停止し、全国民をも破門にする、宗教裁判のおよびローマ教皇の権力をそなえたものもろの独裁権力を付与された支配を押しつける国際大会なるものを、どう考えたらよいのか？ その愚かさをおそらくいっそう明白にするように、この独裁政府を、たぶんきわめて誠実であろうが、名も知られていない、相当無知な、自分ではまったく未知の人々をもつて構成したあと、アメリカに遠ざけた大会をどう考えたらよいのか？ かくしてわれわれの敵たるブルジョアは、われわれの大会を嘲笑し、国際労働者協会は新たな圧制を打ち建てるために旧圧制と闘うにとどまり、現存の不条理に堂々としてかわろうとして新たな不条理をつくり出そうとしている、と主張するのも当然である。

タリアートに対し、プロレタリアートのブルジョアジーに対すると同様の、奴隷的従属におちいることになるであらう。

国家を語る者は必然的に支配を語り、したがって奴隷制を語らなくてはならない。公然もしくは仮装の奴隷制のない国家のごときは考えられない。これゆえに、われわれは国家の敵なのである。

「支配階級に組織されたプロレタリアート」とは何を意味するのか？ 彼らが全体として公共の物ごとの管理にあたるということか？ ドイツ人は約四千万を数える。この四千万人が政府に加わり、全人民が支配するとしたら、被支配者は存在しなくなるまいだろうか？ そのとき、国家は存在しなくなるだろう。だが、もしも国家が存在するとしたら、被支配者が存在し、奴隷も存在するわけであらう。

マルクス主義理論では、このディレンマはいとも簡単に解決される。マルクス主義者たちが人民政府によって理解するのは、普通選挙によって人民に選ばれた少数の代表による人民の政府である。国民全体によるいわゆる人民代表と国家統治者との選挙、これが民主主義派と同じくマルクス主義者の最後のことばであるが、これこそは、少数統治者の専制をかくす欺瞞、人民の意志と称してかかげられるだけにいっそう危険な欺瞞である。

したがってこの問題をいかなる角度から考察するにしても、同じ憎むべき結果、すなわち特権の少数者による

II 国家と無政府

アムステルダム国際社会史研究所は、『国家と無政府』から以下の抜粋を収録することを快く許可された。一八七三年にロシア語で出版され、かつてフランス語に訳されることになった本書は、ライデン（オランダ）のE・J・ブリル注釈の上記研究所「バクレーン・アルシウ」の第三巻である。仏訳はマルセル・ボデーのものである（ロシア語版邦訳、石）。
（ロシア語版邦訳、石）

われわれはすでに何回も、ラサールおよびマルクスの、労働者に、最高の理想としてではないにせよ、少なくとも直接の本質的目標として「人民国家」、彼らの説明したところでは「支配階級として組織されたプロレタリアート」にはかならないこの国家を建設することをすすめる理論に対し、きわめて強烈な反感を表明してきた。もしもプロレタリアートが支配階級になることとしたら、彼らはだれを支配するのか、と人は問うであらう。してみると、この新しい支配階級、この新しい国家に服従せしめられる階級が存在することになり、これはたとえば下層農民であって、彼らは周知のようにマルクシアンのたちのお気に入りではなく、文明の最低段階にあっておそらく都市および工場のプロレタリアートに指導されるであらう。それとも、問題を人種の見地から考えるならば、ドイツ人にとってはスラヴ人の問題になるであらう。スラヴ人は、同じ理由で、勝ち誇るドイツのプロレ

数知れぬ多数民衆の支配に達する。ところが、マルクス主義者はこの少数者が労働者からなるであらうという。いかにも、たしかに旧労働者から。しかし彼らは、統治者もしくは民衆の代表になるやいなや、労働者ではなくなり、プロレタリアの世界を国家の高みから眺めはじめである。もはや彼らは、民衆を代表するのではなく、彼ら自身と自己の民衆統治の権利の主張とを代表するであらう。これを疑う者は、人間性を知らない者だ。

これら選ばれた人々は他方では確信的な、さらに学識ある社会主義者であるだろう。ラサール主義者やマルクス主義者の書くものにたえず出てくる科学的社會主義者、社会的社會主義という言葉は、それだけで、この偽りの人民国家が新たな、ごく限られた真実のもしくは自称する学者の貴族階級による一般民衆の専制的統治にかならないことを証明している。民衆は学者ではないため、統治者としての仕事からまったく免除され、すべてが被治者の群の中に統合されるだろう。みごとな解放なかな！

マルクス主義者たちもこの矛盾を理解しており、学者の政府中心主義的な管理は、最も鈍重で、最もやっかいな、最も軽蔑すべきものであり、どのような民主的形態をとろうとも、真実の独裁になるであらうことを認め、この独裁は一時的な短期のものであるだろうと考えて、みずからを慰めている。彼らは、独裁の唯一の心遣い、唯一の目的は、民衆を教育し、彼らを経済的にも政治的

にも、いっさいの統治が間もなく不用になるような水準にまで高めることにあつたと主張する。そして国家は、その政治的すなわち強権的性格を失つたあと、おのずから経済的利害およびコミュニケーションのまったく自由な組織に変わるであらうという。

ここには明白な矛盾がある。もしも彼らの国家が本当に「人民国家」であるならば、それを廃止するどんな理由があるのか？ 他方、もしもその廃止が民衆の現実の解放のために必要であるならば、どうしてそれを「人民国家」と称することができるのか？ 彼らとの論争においてわれわれは、労働者大衆の自由な組織、自由またはアナキー、すなわち下から上への組織こそは、社会進歩の究極の目標であり、また彼らの「人民国家」をもふくめていっさいの国家はくびきであり、これは一方では専制を、他方では奴隷制を生みだすことを彼らに認めさせたのである。

彼らのいうところによると、この国家のくびき、この独裁は、民衆の全体的解放に到達するための過渡的段階として必要である。アナキーまたは自由は目的であり、国家もしくは独裁は手段である。したがって人民大衆を解放するには、彼らを抑圧することからはじめなければならないという。

今のところわれわれの論争は、このようなくいちがいの点で停止している。マルクス主義者たちは、ただ独裁、むしろ彼らの独裁のみが民衆の自由をつくりだすこ

とができると主張する。これに対してわれわれは、いかなる独裁も可能なかぎり長く自己を維持すること以外の目的をもたず、それはただ民衆のあいだに彼らに従う奴隷制を生みだし、この奴隷制の中で民衆を教化しうのみであると答える。自由をつくりだすのは自由によってのみ、すなわち全民衆の蜂起と勤労者大衆の下から上への自由な組織によってのみ可能である。

……反権威主義的社会主義者もしくはアナキストの政治・社会理論は、かならずや彼らをあらゆる政府、ブルジョア統治のあらゆる形態からまったく決裂せしめ、社会革命以外の解決方法を残さないのに対し、逆の理論、すなわち権威主義的共産主義者および科学的権威主義の理論は、戦術という口実の下に、その支持者たちを政府およびさまざまなブルジョア政党との絶えざる妥協に引きよせ、わなにつまり彼らを直接反動の陣営に押しやるのである。

……この綱領の基本点、これは国家という唯一の手段によるプロレタリアートの（自称）解放である。しかしこのためには、国家がブルジョア資本のくびきを振り落としてプロレタリアートの解放者となることを引き受けなくてはならない。では、どのようにして国家にこうした意志を教えこむのか？ このためには二つの手段しかない。プロレタリアートが革命をやつて国家を奪取するという英雄的手段がある。国家を奪取したあと、われわれの考えでは、国家はプロレタリア大衆の永遠の牢獄で

バクーニンおよびマルクスとバリ・コミュニケーション

ある以上、ただちに破壊しなければならない。ところが、マルクス氏の理論では、民衆は、国家を破壊してはならないのみか、反対にそれを強化し、より強力にし、かかる形態で、民衆の恩恵者、保護者、教育者、共産党の首脳者たち、要するに彼らのやり方ですぐに民衆の解放にとりかかるマルクス氏とその友人たちの意のままに供しなければならぬというのだ。

彼らは、無知な民衆は良き保護を必要とするという理由で、政権を掌握する。彼らは国営銀行を創立し、これが商業、工業、農業のすべて、および科学的生産をさへその手に集中し、一方、人民大衆は、国家の技師たちの直接の命令のもとで二つの軍隊、工業軍と農業軍とに分けられ、彼ら技師たちは特権的な政治・学問の新たなカーストを形成するであらう。

ドイツ共産主義派によって民衆にどのような輝かしい目標が割当てられているかを見るがよい！

以下は、バリ・コミュニケーションに関するバクーニンとマルクスとの、ともに感嘆すべき二つのテキストである。これらはコミュニケーション敗北（一八七一年五月）の翌日に書かれたものである。二つとも、最初のプロレタリア革命、すなわち国家廃止の革命であったコミュニケーションの経験から、それぞれに引き出したテーマを展開している。

バクーニンのテキストには、意表をつくようなものは何もない。それは実際彼が前に書いたものと同じ線上にある。そこにリベルテール社会主義の真髓が見出される。

これに反し、マルクスが、当時マルクス主義者もバクーニン主義者も参加していた労働者インターナショナルの総務委員会の名で起草した宣言には、意外なものがある。これは実に、起草者がインターナショナルの二つの流派を和解せよとした努力の結果なのである。

こうして、それは、一八七一年以前および以後のマルクスの著作とはいちじるしく異なり、奇異にもバクーニンの書いたものに似ている。それは、しかるべき時刻をおいてみると、マルクス主義とアナキズムとの間に架けられた稀有な橋の一つ、「権威主義」思想とリベルテール思想とを綜合しようとする数少ない努力の一つとみなすことができる。

「フランスの内乱」としてもよく知られているこの宣言で、マルクスは一八四八年「共産党宣言」の若干の節を訂正した。この著名な文書の起草者であるマルクスとエンゲルスは、そこではプロレタリア革命の観念を段階によって説明した。第一の段階は政治権力の獲得であり、これによって生産手段、運輸手段、信用が国家の手に「少しずつ」集中化されるであろうという。

階級敵対が消滅し、公権力がその政治的性格を失い、すべての生産が、もはや国家の手ではなく「結合した諸個人」の手に集中されるのは、長期な進化の終局においてでしかないであろう。このリベラルタイプの結合においては、各人の自由な発展が全員の自由な発展の条件となるであろうという。

フランスの社会主義者たちとはちがって、「共産党宣言」をドイツ語の原典で知っていたバクレーンは、革命をこのように二つの、最初のそれははたはたしく国家主義的な、段階に分けることを批判する機会をのがしはしなかった。彼は次のように批判した。「唯一の所有者となった国家は……また唯一の資本家、銀行家、融資者、組織者、全国民労働の管理者、生産の配分者となるであろう。これが、現代共産主義の理想であり、基本原則である」。さらに、「この革命は、現在の所有者および資本家から継続もしくは暴力的に収用を行ない、また国家がいっさいの土地と資本とを横取りするところに在り、国家は、この大きな経済的および政治的な使命を果たさうするためには、必然的にきわめて強力であり、きわめて中央集権的でなくてはならないであろう。国家は、己が任命し、耕作のために組織され訓練された農業労働者の大群を指揮する技術者たちを使つて、土地の耕作を管理し指導するであろう。それと同時に国家

は、現在の銀行をすべて破壊した跡に、国民のいっさいの労働と商業との唯一の合資銀行を設立するであろう」

さらに、「マルクス氏の人民国家には、いかなる特権階級も存在しないであろう、とわれわれは聞かされる。すべての人が、たんに法のおよび政治的見地だけでなく、なお経済的見地からしても平等になるであろう。少なくとも彼らはそれを約束している。もっとも私は、彼らが固執するやり方、彼らがたどる方途からして、彼らがいっまでもその約束をまもることには強い疑いをいだいている。彼らのいうところでは、特権階級はもはや存在しなくなるであろう。だが、今日すべての政府が行なっているように、大衆を政治的に支配し管理するだけでなく、なお生産、富の正しい配分、土地の耕作、工場の建設と発展、商業の組織と指導、さいごに国家という唯一の銀行による生産への投資をその手に集中することによって、経済的にも管理する、極度に複雑な政府が存在することになるであろう」

バクレーンの批判に刺激されてマルクスとエンゲルスとは、一八四八年の彼らのあまりに国家主義的な見解を改訂するの必要を感じた。一八七二年六月二十四日付の、「宣言」再版の序文で、彼らは、「種々の点から」、一八四八年のテクストの問題の節に今や「ちがったい方」をすることに決めた。そして彼らはとくにこの改訂をする根拠として、「まず二月革命と、ついでそれ以上プロレタリアートがはじめて二月月のあいだ政権をにぎったパリ・コミューンとの実践的経験」を援用した。結局、「こうしたことすべてから、この綱領はもはやどこどころ時代おくれである。とくにコミューンは、労働者階級は、既存の国家機関を掌握してそれを己の目的に役立てることで満足してはならないという証拠を提供した」。一八七一年の宣言

はまた、コミューンは「労働の経済的解放を実現するため」に見出された政治形態」であることを言明している。

マルクス主義者たることに異論の余地はないフランツ・メーリングも、そのカール・マルクスの伝記で、パリ・コミューンをたまたま一八七一年の宣言は、この点、国家の解体をただ長期の過程と考えた「共産党宣言」をある程度訂正したものであることを強調した。だが、そのあとメーリングは、マルクスの死後エンゲルスが、アナキズム思潮との戦いのなかでその訂正を切り捨て、「宣言」のもとの見解に復帰しなければならなかったことを確言した。

「一八七一年の宣言」の起草者のいささか突然の「転換」は、バクレーンの疑惑を喚起せしめなかった。彼はコミューンについてこう書いた。「その効果たるやかくも強烈であつたため、マルクス主義者たち自身、この蜂起によって思想のすべてを覆えされ、その前に脱帽することをよぎなくされた。彼らはそれ以上のことをした。この上もなく単純な論理と彼らの真実の感情とに直面して彼らは、コミューンの綱領と目標こそは彼らのものであつたと言明した。これは、まさしく道化の、だが強いられたい変装だ。彼らは、そうしないとすべての人々から見はなされ、見すてられるということで、そうせざるをえなかったが、この革命が世の人々すべてに喚起した情熱は、それほど強烈だったのである」

またバクレーンはこう観察する。「ハーグ大会（一八七二年九月）においてエンゲルス氏は、『共産党宣言』の若干のページを読んでひき起こされる忌むべき印象に驚き、急いでそれは彼ら自身（マルクスおよびエンゲルス）放棄した古い理論である」と言明した。彼がこういったとすれば、それは真摯さを欠く

ものであった。というのは、この大会の前夜にさえ、マルクス主義者たちはこの文書をあらゆる国々に配布させようと努力していたからだ」

バクレーンのジュラの弟子ジャム・ギョームはどうかというところ、彼は「一八七一年の宣言」を読んでこう反応した。「これは、マルクスがおのれの綱領を放棄して連合主義思想に加担したようにみえる、驚くべき諸原理の宣言である。そこに見えるのは、『資本論』の著者の真実の転向であろうか、少なくとも彼が事件の衝撃のもとに譲歩した一時の誘惑であろうか？ それとも、コミューンの綱領への皮相な支持によって、この名に付随する威信をかき集めようとする、彼なりの巧妙なやり方であつたのか？」

現代では、人々がそのおかげで目下刊行中の専門的な「バクレーン・アルシヴ」版に浴しているアルツール・レーニンでも、「宣言」の思想とマルクスの他のすべての著作との間の矛盾を力説した。「強権主義的傾向と反強権主義的傾向との闘争が（第一インターナショナル内部で）その頂点に達したその時に、マルクスが、パリのプロレタリアートの革命的蜂起の巨大な成果の印象のもとに、この革命について、彼があらゆる手段を用いて（インターナショナル内部で）抗争した、あの反強権主義的傾向の綱領としてほとんど特質づけうるであろうほどに、彼が従来代表してきたとは反対の思想を表明した。……彼は、総務委員会の輝かしい宣言が……『科学的社会主義』体系の構築にはまったく加えられないことをなんら疑っていない。内乱は最高度にマルクス主義的ではない。……パリ・コミューンは、マルクスの国家社会主義とはなんら共通するところがなく、むしろブルードンの思想およびバクレーンの連合主

パリは自ら廃位し、フランスに、ヨーロッパに、全世界に、自由と生命とを与えるために、自己の失墜を熱狂をもって宣言した。

パリはまた、奴隷であるすべての民衆に対して（奴隷でない大衆がいるであろうか？）解放と救済の唯一の道を示したことによって、あらためてその歴史的なイニシアティブの力を確認した。

パリはブルジョア急進主義の伝統に対して死の一撃を加え、革命的社会主義に現実的基礎を与えた。

パリはフランスとヨーロッパのすべての反動的な手合いに對して再び呪いたるに値した。

パリは、勝ち誇った反動を莊重に否認するために、自己の廢墟に自らを葬り去った。パリは自らの破産でフランスの名誉と将来を救い、あきらめた人類に、もし生命と知性と精神力とが上流階級から奪われてしまったとしても、それらはプロレタリアートの中に力に溢れた輝かしい未来を保っていることを証明した。

パリは新紀元、人民大衆の決定的な完全な解放と、國家に反し國家を越えて、今や現実のものとなった大衆の連帯の紀元を創出した。

パリは愛國心を殺し、その廢墟の上に人間の宗教を創始した。

パリは、人道主義者であり無神論者であることを宣言し、神聖な虚構を社会生活の偉大な現実と科学への信頼とに変え、宗教的・政治的・法制的な道德の虚偽と不正

義理論とまったく合致していた。……パリ・コミューンの本質的原理は、マルクスによると、國家の中央集權主義を生産者の自治により、自主的コミューンの連合体によってとりかえ、それまで國家に属していた発意の權利をこれらコミューンに委ねなければならぬというのであった……

この「内乱」は、國家の衰滅を問題とする、その他のあらゆるマルクス主義著作とまったく矛盾している。パリ・コミューンは生産手段を國家の手に集中しなかった。パリ・コミューンの目的は、國家を「衰弱させる」ことにはなく、直ちに廢止することにあった……國家の消滅はもはや弁証法的歴史過程の不可避な究極的結果、それ自体より高度の生産形態を条件とする、社会のより高い段階の結果ではなかった。

パリ・コミューンは、マルクスが先にその廢止の序曲として規定した条件を何一つ実現せずに、國家を廢止した。……コミューンによるブルジョア國家の打破は、それにかわる新しい國家を建てることを目的としなかった。……その目的は、新しい國家機構を建設することではなく、経済的および連合主義的土台にもとづく社会の組織化を國家にとってかえることにあった。……「フランスの内乱」で問題にされているのは、國家の「衰弱」ではなく、その即時的かつ全的な根絶であった……同様にマルクス学者マクシミアン・リュベルもこう認めた。「マルクスがプロレタリアートによる國家の征服と廢止についていだいていた觀念が、パリ・コミューンに関する『宣言』にその決定的な形態を見出し、これが、問題について『共產黨宣言』がわれわれに与える思想と異なることは、否定されない」

だが、これら博識者二人の間にも不一致がある。ぜひはとも

あれ、マルクスに「強權主義者」を認めるレーニンがは、「内乱」がマルクスの社会主義における「異体」であると確言するのは反對に、リュベルは、マルクスのうちに「リベルテール」を見ようとする。……「内乱」に彼の「決定的な思想形態」を見出したのである。

しかし、今日アナキズムとマルクス主義との間に綜合を見つけようとする努力において、一八七一年の「宣言」が、強權主義とリベルテールとの二つの思潮を有効に和解せしめることを示す第一の証左とみなされなければならないことには、依然変わりはない。

バクニンのパリ・コミューン観

……革命的社會主義は、パリ・コミューンの中で最初の目覚ましい実践的な発現を企てたばかりである。

私はパリ・コミューンの支持者である。それは、君主制と聖職者を擁護する反動によって血の中で鎮圧され殺戮されたために、ヨーロッパ・プロレタリアートの心と想像力の中で、より生々しい、より力強いものとなった。私は、とくにそれが國家の明確な、大胆な否定であったために、パリ・コミューンの支持者なのである。

この國家の否定が、これまでとくに政治的中央集權の國であつたフランスではつきりと表明されたこと、それを發意したのがまさしくパリ、偉大なフランス文明の史的創造者であり指導者であつたパリであつたことは、素晴らしい歴史的事実である。

を、あらゆる人間的道德の永遠の基礎、自由と正義と平等と友愛との原理に変えた。

英雄的な、理性的なパリ、パリは人類の運命への徹底した信頼を、自らの光榮ある失墜と自らの死によって維持し、確認し、より力強い生き生きとした信頼を來たるべき世代に伝えた。

最も勇敢な若者たちの血に浸されたパリ、それはあらゆるキリスト教会と不正の大神祭、法王の即座の指示の下に國際的に同盟したヨーロッパの反動によって十字架にかけた人類である。しかし諸民族の、連帯した、國際的な來たるべき革命は、パリの復活となるであろう。

これこそが、そのようなものが、パリ・コミューンの永遠に忘れられない二カ月にわたる存在と崩壊の真の意味であり、壮大な、意義深い結果である。

パリ・コミューンはあまりにも短い間しか続かなかつた。それは、ヴェルサイユの反動に對して耐えねばならなかつた苛烈な闘いの中で、その社會主義綱領を、適用するといふのではないが理論的に練りあげたためには、その内部的發展にあまりにも障害が多かつたのである。もっとも、コミューンのメンバーの大多数は明確な社會主義ではなかつたこと、それは認めなければならぬ。しかし、また彼らがいかにそれらに耐えかねたとしても、それは彼らが時勢のあらがいがたい力によって、社会的境遇の本質によって、彼らの立場の必然性によって、内的な確信によってではなく、打ち勝たないほど引き立てられた

からである。われらの友ヴァルランを自然に中心としていた社会主義者たちは、コミューンの中ではごく微弱な少数派を形成していたにすぎなかった。彼らはせいぜい十四、五人でしかなかった。残りはジャコバン派であった。

しかしさまざまなジャコバン派がいたことも理解しなくてはならない。M・ガンベッタのように、昔の革命的信条を捨てて、統一と権威の崇拜という点でしかジャコバン主義を残していない、実利的な、厚かましい、専制的な、形式的な共和主義ゆえに、民衆のフランスをプロシア人たちに、のちに自国の反動に引き渡した弁護士や空論家のジャコバン派もいるし、まったく革命的なジャコバン派、英雄、反動の傲慢の前で彼らの良心を屈伏させるよりは、むしろ革命の必要のためには彼らの統一、秘蔵の権威をも犠牲にできる、一七九三年の民主主義的信条を誠実に代表した最後の人々もいる。偉大な精神と性格の持ち主ドゥレクリューズを自然に中心にして、これら高潔なジャコバン派たちは、何よりもまず革命の勝利を欲していた。人民大衆なしの革命はありえないので、これら的大衆は今日では顯著に社会主義の本能を持ち、経済的・社会的革命以外の革命をもしや許さないで、革命運動の論理によってつねにいっそう引き立てられていた誠実なジャコバン派たちは、結局自らに反して社会主義者となるにいたったのである。

以上がまさしくパリ・コミューンに参加したジャコバ

ン派たちの状況であった。ドゥレクリューズと彼とともにいた多くの人々は、その全般的精神と約束とが積極的に社会主義的であった諸綱領と諸宣言とに署名している。しかし彼らのあらゆる誠実さと熱意とにもかわらず、彼らは内的に確信していたというより外的に引きずられていた社会主義者であったので、抱いたばかりの社会主義と矛盾する多くのブルジョアの偏見に打ちかち、それを自分自身の中で抹殺する時間と能力もなかったのだ、その内的な闘いのために不随となった彼らは、一般論以上に出ることも、ブルジョア社会との彼らの連帯とあらゆるつながりとを永遠に断ち切る決定的な措置のどれか一つをとることも、決してできなかったのである。

これはコミューンにとつても彼らにとつても大きな不幸であった。彼らはそのために不随にさせられ、そして彼らはコミューンを不随にさせた。しかしそのことを過失として、彼らを非難することはできない。人間は一日でほかのものに変わることはできないし、意のままに本性や習慣を変えることもできない。彼らは、コミューンのために殺されることによって、彼らの誠実さを示した。誰がそれ以上をあえて彼らに要求できよう。彼らは、彼らがその影響の下に考え行動したパリの民衆自身が、熟慮した思想ないし信条によってよりも、ずっと本能によって社会主義的であつただけに、なおのこと許されるべきである。民衆のあらゆる渴望は、もっと高度に、そしてもっとばらに社会主義的であつた。しかし彼らの思想、

あるいはむしろ彼らの伝統的な意見は、まだその高さに達するには程遠かった。フランスの大都市のプロレタリアートの中にも、まだ多くのジャコバンの偏見と多くの独裁的な政府中心の心の動きが残っていた。宗教教育の宿命的な産物、権威の崇拜、あらゆる不幸の、あらゆる頹廢の、あらゆる大衆の隷属の歴史的源泉は、まだ完全には彼らの胸中から根絶されてはいなかった。民衆の中の最も知的な若者たち、最も確信ある社会主義者たちですら、完全な形ではそれを免れてはいなかったのである。彼らの意識の中を探ってみたまえ。諸君はそこに、あるは暗い一隅に追いやられた、きわめて緩和された、しかしこれは真実なのだが完全には死んでいない、ジャコバン派、政府中心主義者を再び見出すことであろう。

しかもコミューンに参加した少数の徹底した社会主義者の状況は、過度にむつかしいものであった。それ自身不完全な、その上せいぜい数千人を擁していたにすぎない第一インターナショナルの組織や、パリの住民の多くの支持を十分にえていないことを自覚していた彼らは、ジャコバンのな大多數に対して日々の闘いを続けなければならなかった。しかもさらになんという環境の中であつたらう！ 彼らは数十万の労働者に仕事とパンを与え、労働者を組織し、武装しなければならず、同時に、包囲され飢えに脅かされていたパリ、プロシア人たちの恩恵と許可とでヴェルサイユに居を定め維持することのできた反動の汚い企てにゆだねられていたパリのよう

な、巨大な都市の中での反動的な陰謀を警戒しなければならなかった。彼らはまた、革命政府と革命軍とをヴェルサイユの政府と軍とに対抗せしめなければならなかった。つまり、君主制と聖職者を擁護する反動と闘うために、彼らは自らの革命的社會主義の第一条件を忘れるか犠牲にして、ジャコバンの反動の中に結集しなければならなかったのである。

同様な事情のただ中であつて、コミューンの中で大多數を占めていたから、最も強力な、そして、なにかんすくきわめて高度の政治的天分や政府中心の組織の伝統と経験とを持っていたジャコバン派たちが、社会主義者よりはるかに優勢であつたのは、自然なことではないか？ 驚かねばならぬこと、それは実際には彼らがあまりその優勢を利用しなかったこと、パリの蜂起にジャコバンのな性格のみを与えなかったこと、反対に彼らは社会革命に向かって引きずられるままになっていたこと、そのことである。

私は、理論的にはきわめて首尾一貫している多くの社会主義者たちが、パリのわれわれの友を、革命の実践の中にあつて十分に社会主義的な態度を示さなかったと非難していること、一方ブルジョア新聞のあらゆるあらゆる探し屋どもが、反対に彼らは社会主義の綱領のみをあまりに忠実に追求したと非難しているのを、知っている。さしあたり、一方の新聞の卑劣な告発者たちは放っておこう！ 私はプロレタリア解放の厳格な理論家たちに対し

て、彼らがわれわれのバリの兄弟に対して不当であると指摘することでしょう。なぜなら、最も適切な理論とこれらの実践への適用との間には、数日では飛び越えることのできない絶大な距離があるからである。例えば、その死が確かなものなので挙げるのだが、ヴァルランを幸いに知ることのできた人なら誰でも、彼の中で、彼の友人たちの中で、社会主義的な信念がいかに情熱的なものであり、いかに熟慮された深いものであるかを知っている。彼らは、その熱烈さと献身と誠実とを彼らと親しくした誰からも決して疑われることのない人々であった。しかしまさしく彼らが誠実な人々であったから、彼らは自分たちの思想と生命とを捧げた巨大な仕事に直面して、自分自身への不信に満ちていた。彼らは自分たちの無力を自覚していた！ 彼らはしかも政治革命と正反対のものである社会革命の中では、個人の行動はほとんど何もでもなく、大衆の自発的行動こそすべてでなければならぬという信条を抱いていたのである。個人がなしうるすべて、それは大衆の本能に呼応する思想を練り、明らかにし、分かつことである。そしてさらに彼らの絶えざる努力によって、革命組織に大衆の生得の力を付与することである。しかし何ごと大衆を越えてではない。そして残りのすべては、民衆自身によってしかできないし、またなされなくてはならない。そうでなければ、人は政治的独裁に、つまり国家の、特権の、不平等の、国家によるあらゆる抑圧の再建に達する。そして

人は、遠回りの、しかし論理的な道を通して、人民大衆の政治的・社会的・経済的隷属の復活に到達する。

ヴァルランと彼のすべての友人たちは、すべての誠実な社会主義者たち同様、一般に民衆の間で生まれ育ったすべての労働者たち同様に、同じ個人の持続的な主導権への、より優れた個人によって行なわれる支配への、まったく正当な反感をこの上なく強く共有していた。そして彼らは何よりもまず公正であったので、彼らは他のすべての人々に対するのと同様に、その用心、その不信を自分たち自身にも向けていたのである。

社会革命は、政治革命から生まれた独裁によってであれ、憲法制定議会によってであれ、布告され組織されうるといふ権威主義的共産主義者たちの、私によればまったく誤った思想に反して、われわれの友人たち、バリの社会主義者たちは、社会革命は大衆の、民衆のグループと提携組織の、自発的な持続的な行動によってしか、成就されることも輝かしい発展に導かれることもないと考えていた。

バリのわれわれの友人たちの考えにはいく度となく道理があった。というのも、いったいどれほど天才的な頭脳があるのであろうか？ あるいは、もし集団的独裁について語りたいのなら、すぐれた能力を恵まれた数百人によって、それは形成されるのであろうか？ その総体が民衆の集団的な意志を形づくる現実の諸利益、渴望、意志、欲求の限らない多様性と相違とを理解し、みなを

満足させることのできる社会組織を發明するための、強力な広大な頭脳とはどんなものであろうか？ その組織は、いずれにせよ、国家の特徴を帯びた暴力が、そこに横たわっている不幸な社会に加えられるであろうブルジョアレスの寝台（強制的な規則を意味するギリシヤ神話の寓話）以外のものでは決してあるまい。

それはこれまでつねに行なわれてきたことであり、社会革命が、大衆に、グループに、コミュニティに、提携組織に、個人にすらも完全な自由を回復させながら、そしてあらゆる暴力の歴史的原因、国家の力とその存在そのものを決定的に破壊しながら、終わらせなければならぬのは、まさしく力による組織のこの古い方式である。国家は、各種の崇拜のあらゆる虚偽とともに法的権利のあらゆる不公平を、自らの失墜の道づれにしなければならぬのであり、その権利と崇拜とは、国家によって代表され、保証され、特権を与えられているあらゆる暴力の、観念の上でも現実の上でも強制された、是認なのである。

国家がもはや存在しないときにのみ、自由が人間世界に回復されること、社会を形成する個人とともに、すべてのグループの、すべての地方組織の現実の利益が、現実の満足を見出しうるであろうことは明らかである。国家が代表すると見なされているが、実際には地方の、コミュニティの、提携組織の、さらに国家に隷属している多数の個人の、実利の一般的な持続的な否定でしかない。

社会全般の利益と称するすべてのものは、抽象的思弁、虚構、虚偽を形成していること、国家はこの抽象的思弁の蔭で、その口実の下に、一国のあらゆる渴望のあらゆる生きいきした力を、自己満足しながら平然と葬るためにくる、大きな屠殺場のようなもの、広い墓場のようなものであることは明らかである。そして、いかなる抽象的思弁も決してそれ自身によってそれ自身のために存在しないように、それが歩くための足も、作るための手も、むさぼるために与えられた生贄の塊りを消化する胃も、持っているように、宗教的ないし天上の抽象、神が、実際には特権階級、聖職者のきわめて明確な、きわめて現実的な利益を表現しているのと同様、その地上の補足である政治的抽象、国家は、今日、主として、でなければもっぱら、搾取的な階級、一面では他のいっさいの階級を吸収する傾向のある、ブルジョアジーの、やはり明確な現実的利益を表現している。

そして聖職者がつねに区分化され、今日でもなお、きわめて有力なきわめて豊かな少数者と、きわめて従属的なかなり貧しい多数者に区分されつつあるように、ブルジョアジーと、国家の行政的・財政的・法制的・学制的・警察的・軍事的なあらゆる機構とともに、工業における、農業における、銀行における、商業におけるブルジョアジーの各種の社会的・政治的な組織は、毎日、現実には支配的な寡頭制の中に融合されつつあり、いずれにせよ虚栄的な、いずれにせよ失意の、永遠の幻想の中に

生きている無数の人間たちは、不可避免的に、つねによりいつそうあらがいがたい力、現在の経済的發展の力でプロレタリアートの方へ押しやられ、あのまったく強力な寡頭制のために盲従する道具として役立てられるはめに陥っているのである。

教会と国家の廃止は、社会の実際の解放の欠くことのできない第一の条件でなくてはならない。その後でのみ社会は、別の形で組織されうるし、されなければならぬ。しかしそれは、上から下へではなく、ある賢者ないし学者が夢みたプランによつてではなく、あるいはある独裁的な力やあるいは普通選挙で選ばれた議会によつて発せられた命令によつてではない。私がいま否定したような、そうした方式は、不可避免的に新しい国家の創設と、したがって政府中心の貴族の形成、すなわち大衆と何らの共通点もない人々の階級の形成に導かれるであろう。そしてこの階級はいかに、共通の幸福あるいは国家を救うためという口実の下に、大衆を搾取し隷属化することをふたたび開始するであろう。

未来の社会組織は下から上のみ、まず提携組織^{アソシエーション}における、ついでコミュニティにおける、地方における、一国における、最終的には国際的・世界的な大連合における、労働者の自由な提携ないし連合によつてつくられなければならない。自由と全般的な幸福の活気ある真の秩序が実現されるのは、その時においてのみであり、この秩序は個人と社会との利益を否認するどころか、反対に

それを肯定し、一致させるのである。

マルクスのバリ・コミュニケーション観^①

バリのプロレタリアートが二月革命を宣言したときに発した「社会的共和制」という叫びは、たんに階級支配の君主制的形態のみでなく、階級支配そのものを廃止すべき共和制への漠然たる渴望を表明したものにほかならなかった。コミュニティは、そのような共和制の実証的な形態であった。

旧統治権力の中核であると同時にフランス労働者階級の社会的磐であったバリは、帝制が遺したこの旧統治権力を復興し永久化しようとするティエールと、彼を支持する田舎地主たちとの企図に反対して武装した。

バリがよく抵抗することができたのは、ただ、包囲という事実のために軍隊を追い払い、それを大多数が労働者からなる国民軍に代えていたからであった。いまや問題はこの事態を永続的制度に転化することであった。したがって、コミュニティの最初の布告は、常備軍を廃止し、それを武装した人民に代えることであった。

コミュニティは、市の各区で普通選挙によつて選出された市議員から構成された。彼ら議員は責任を負い、いつでも解任することができた。議員の大多数は当然に労働者か、あるいは労働者階級の公認の代表者であった。コミュニティは、議会的な機関ではなく、執行と立法とを

同時に行なう行動的機関でなければならなかった。警察は、中央政府の道具ではなくなり、その政治的屬性を直ちに剝奪されて、責任を負いかついても解任できる、コミュニティの道具に変えられた。行政府の他のあらゆる部門の官吏についても同様であった。コミュニティの議員をはじめ最低の段階にいたるまで、公務は労働者なみの賃金で果たされなければならなかった。国家の高位高官者たちの伝統的な賄賂と交際費とは、この高位高官者たち自身とともに姿を消した。公職は中央政府の手先たちの私有物ではなくなった。たんに市政だけでなく、それまで国家が行なってきたいっさいの発議権が、コミュニティの手中に返された。

旧来の統治権力の物的道具であった常備軍と警察とが廃止されると、コミュニティは、抑圧の精神的道具である聖職者の権力を破壊する仕事に熱中し、教会と国家との分離、財団たるかぎりでのすべての教会財産の没収を布令した。聖職者は静かな隠棲所に行かせられ、そこで彼らの先人たる使徒にならって信者の施しで生活するようにされた。教育施設はすべて人民に無料で公開され、同時に教会および国家のあらゆる干渉から取りのけられた。かくして教育はすべての者が受けうるものにされたばかりでなく、学問自体も、階級的偏見と政府権力とに負わされてきた束縛から解放された。

司法官たちは、彼らが忠誠の誓いをこもこも立てたり破ったりしたすべての歴代政府に対するその卑屈な服従

を、ただ覆いかくすのに役立つにすぎなかったあの虚偽の独立を剝奪された。他のすべての公務員と同様に、治安判事と裁判官も、選挙され、責任を負い、解任できなければならないかった。

バリ・コミュニティは、もちろん、フランスのあらゆる大工業中心地のモデルとして役立たなければならなかった。コミュニティの制度がいったんバリと第二級の諸都市にうち立てられると、旧来の中央集権政府は、地方でもまた、生産者の自治に席を譲らなければならなかったであろう。コミュニティが展開させるだけの時間をもたなかった全国的組織の略図では、コミュニティは、田舎の最も小さな部落でさえその政治形態でなければならぬし、また農村地方でも常備軍を服務期間がきわめて短い国民兵にとり代えなければならないことがはつきり述べられている。各県の農村コミュニティは、県の首都における代表者会議をつうじてその共同の物ごとを処理し、これら代表者会議がこんどはその代表をバリの全国代表者会議におくることになっていた。代議員はいつても解任することができ、また選挙人の強制委任に拘束されるはずであった。中央政府になお残り、誤っていわれたように、ことさらに廃止されるべきではない少数の、だが重要な機能は、コミュニティの職員たち、別にいえば厳格に責任を負う職員たちによつて果たされることになっていた。

国民の統一は、破壊されるべきではなく、反対にコミ

ユニオン体制によって組織されるべきであった。それは、この統一の具現であると主張し、しかも、国民に寄生する瘤にすぎないのに、国民自体から独立し、国民に優越しようとした国家権力を破壊することによってこそ、現実のものとなるはずであった。旧政府権力の純粹に抑圧的な諸機関を切り捨てることは重要であったが、その正当な諸機能は、社会自体に優る地位を要求した権力からもぎとって、社会の責任を負う奉仕者に返されることになっていった。普通選挙は、支配階級の構成員の誰かが議会に人民を「代表し」、そして踏みつけるかを、三年ないし六年に一度決めるのではなく、ユニオンに組織された人民に役立つべきはそれであった。それは、個人の選択が自己の事業に必要な労働者や監督を採す雇主に役立つのと同じである。また会社は、個人と同じく、一般に実務に関して適材を適所に配置することを知っており、ひとたび失策してもそれをすぐに改めるのを知っていることは、周知の事実である。

他方、普通選挙を階層制的な任命にかえることほど、ユニオンの精神に無縁なものはありえなかった。まったく新しい歴史的形成物が、若干類似点のある古い、また消滅させた社会生活の諸形態ととりかえらるるの、概してその運命である。かくして人々は、近代国家の権力を破壊したこの新しいユニオンのうちに、はじめこの国家権力に先行し、のちにはその基礎となった中世ユニオンの復活を見ようとしたのである。

えは……、ビスマルクのような人間の頭にしか浮かびえないことであつた。

ユニオンは、二つの大支出源、常備軍と国家の官僚制とを廃止することによって、あらゆるブルジョア革命のあの合言葉、安あがりの政府を実現した。ユニオンの存在そのものが君主制の存在しないことを前提としたし、君主制は、少なくともヨーロッパでは正常の重荷であり、階級支配の不可欠な仮面なのである。ユニオンは、共和制に真に民主的な制度の基礎を与えた。しかし「安あがりの政府」も「真の共和制」も、ユニオンの終局の目標ではなかった。それらは付随物にすぎなかった。

ユニオンがさまざまに解釈され、また種々の利害関心から引き合いにだされたことは、ユニオンがまったく発展可能な政治形態であったことを示しており、これに対して従来の政府形態はすべて、抑圧を強調したものであったのである。ユニオンの真の秘密はこうであった。すなわち、それは本質的に労働者階級の政府であり、横領者階級に対する生産者階級の闘争の所産であり、労働の経済的解放の実現を可能ならしめる、ついに発見された政治形態たることであった。

ユニオン体制は、はじめは暴力によって生み出されたとはいえ、いまは社会的生産の有力な一要因となっているこの大国民の統一を、モンテスキューやジロンド党員の夢想に従って小国家の連合体に分解する企てと、とりかがえられた。

ユニオンと国家権力との敵対が、超中央集権に対する昔の闘争の過度の形態であると思いがいだされた。他の国々では特殊の歴史的事情が、フランスで行なわれたようなブルジョアの政府形態の古典的發展を妨げ、またイギリスの場合のように、腐敗した教区会や私利をむさぼる市会議員、都市の残酷な救済委員、また州では事実上世襲的な治安判事によって、国家の大中央機関を補うことができた。

ユニオン体制は、社会に寄生し、その自由な運動を麻痺させている国家という寄生物にこれまで奪われてきたすべての力を、社会の体に返したことであろう。こうすることによってのみ、ユニオンはフランスの再生の出発点となったであらう。

……ユニオンの存在自体が、明白なことがらとして、都市の自由を含意した。しかしそれはこれからはもはや、今は廃止された国家権力に対する障害物ではなかった。都市の行政をプロシア国家の警察機関における第二級の歯車にすぎないものに引き下げるプロシア的自治体制度に等しい一七九一年のフランスの旧自治体組織という戯画へのあこがれを、バリ・ユニオンに帰する考

バクーニンと労働者自主管理

I 協同組合について

……「インターナショナル」の目標は何か？ それは、すべての国の労働者の連帯的行動による労働者階級の解放ではないのか？ またブルジョア的な協同組合の目標は何か？ それは、ごく少数の労働者を共通の貧困から引き離し、大多数者を犠牲にして、彼らをブルジョアたらしめることである。

……千人もの人々が十人の者に搾取され抑圧されているとしよう。この千人の中に、こういうことをいう者が二十人、三十人、またはそれ以上いたらどう考えるか？ 「われわれは犠牲者たることに飽きあきした。しかし、他方、少数者の繁栄は絶対に大多数者の犠牲を必要とする以上、万人の救いを望むことは滑稽であるから、われわれは仲間の者たちを彼らの運命のままにし、自分たちだけのことを考え、幸福になるために、こんどはわれわれがブルジョアに、搾取者にならう。」

これは裏切りではなからうか？

……彼らの間にもきわめて誠実な人々、自分はごまかされても他人をごまかすことのない多くの人々がいる。その多くは、ブルジョアのやり方以外のやり方を知らず、見もせず、それがあることを思いもせずに、ブルジョア階級と闘うのはこの同じやり方を用いるのが公正に戦うことなのだと考えている。彼らは単純にも、労働を台なしにすることで労働を解放することができ、ブルジョア階級が彼らを押しつぶすのに用いた武器を、ブルジョア階級自身を倒すのに役立てることができると考えている。

これは大きな誤りだ。これら素朴な人々は、富と学問と一世紀にもわたる慣行との独占が、公然または仮装の、しかしつねに積極的である国家が、そして現社会のあらゆる組織が、プロレタリア階級に対する絶大な優越性をブルジョア階級に与えていることを理解していない。したがって、こうした条件での闘いはあまりに不釣り合いであり、合理的には成功を望むことはできない。それに、ブルジョア階級が武器となるのは、ほいままな競争、各人の全員に対する戦い、他人の破壊の上に獲得する繁栄にほかならないがゆえに、そうした武器、そうした手段は、ブルジョア階級だけに役立つことができ、プロレタリア階級の唯一の力である連帯を必然的に破壊するのである。

……われわれもまた協同組合を欲している。われわれは、あらゆる労働および学問の部門における協同組合こ

そは、将来社会組織の優越した形態であるだろうと確信さえしている。だが同時に、協同組合は、平等の上に建設され、すべての資本、土地を含めてすべての労働用具が、集団的所有として労働に返還されるときにのみ、栄え、十分に発展し、人間の全産業を網羅しうるであろうことをも、われわれは知っている。

したがってわれわれは、とりわけこの資本および生産用具の奪取の要求と、すべての国の労働者の国際的勢力の組織化とを、わが偉大な「協会」の主たる目標と考えるものである。

これがひとたび認められるなら、われわれは、現在の協同組合企業の反対者であるどころか、多くの点でそれが必要なものと考えている。まず初めに、それは労働者を、ブルジョアの資本や管理の介入なしに、彼らの仕事を自分で組織し、実行し、管理することに慣れさせるからであり、さしあたりはこの点にその主たる利点があるとしている。

望ましいのは、社会的清算の時刻が鳴り知らされるとき、すべての国、すべての地域に多数の協同組合が見出されることであり、それらがよく組織され、とりわけブルジョアの排外主義でなく、連帯と集団性との原則の上に建設されているならば、たいした騒乱なしに、社会を現在の状態から平等と正義の状態に移らせるであろう。しかしこの使命を果たしうるのは、国際労働者協会はその原理原則を基礎とする協同組合のみを保護育成

することが必要である。

II 労働者組合と集団的所有

必要なのは、特権階級の支配と富者のための民衆の労働の搾取とを、教会の祝福を得て正規のものとし、是認し、擁護すること以外の任務を、かつてもったことのない国家を廃止することである。したがって、工業および農業、ならびに科学および芸術にわたる、労働者の組合の自由な結成とその自由な連合とによって社会を下から上に向かって再組織し、労働者は同時に科学者、芸術家となり、芸術家、学者もまた筋肉労働者となり、土地、資本、原料、労働用具、すなわち生産に役立ついっさいの大財産の集団的所有を基礎とする自由な組合とその連合を結成し、私用品以外の物を、個人の所有としてまた遺産として、残さないことが必要である。

- 1 「告白」(一八五七年、パリ・一九三二年)より抜萃。(内海周平訳「バクニンII」三一書房)
- 2 マツタイニ主義者たち イタリアの共和主義陰謀家、イタリア統一の発頭人の一人、ジョゼッペ・マツタイニ Giuseppe Mazzini (1805—1872) の弟子たち。
- 3 Nicolas Ogareff (1813—1877) ロシアの詩人 アレクサ

ンドル・ゲルツェンのロンドンでの雑誌「コロコル(鐘)」の共同編集者、バクニンの通信者。ゲルツェンについては本書二六ページを見よ。

4 Nicolas Outine (1845—1883) スイス在住のロシア人亡命者、マルクス主義者。一八六八年の「平和・自由同盟」のベルン大会、および一八七一年の「インターナショナル」ロンドン大会に参加。一八七〇—一八七一年、ジュネーヴの「エガリテ(平等)」誌編集者。

5 この中傷によると、革命家バクニンは、あとで語るように(本書二六ページ)、ロシア政府のスパイだといわれている。

6 Giuseppe Fanelli (1827—1877) 初めはマツタイニおよびガリバルディと相携えたイタリアの共和主義者。マツタイニとは、その国家主義的中央集権主義をともにせずして分裂。一八六四年以降はバクニンの協力者かつ友人となる。バクニンは、彼をインターナショナルと同時に国際社会主義的民主主義同盟との支部をつくるため、スペイン語を話さないにもかかわらず、派遣した(本書一四〇ページを見よ)。

7 Césaire de Peape については二〇九—二一〇ページを見よ。—Eugène Varlin (1839—1871) フランスのインターナショナルリスト、パリ・コミューンの一員、一八七一年三月二十八日、ロシュエ街でヴェルサイユ反革命軍に銃殺された。

8 Wilhelm Liebknecht (1826—1900) ドイツのマルクス主義導入者。アイゼナッハ大会(一八六九年)における社会民主党の創立者。

9 これは、当時ジュネーヴのインターナショナルが会合した

- の政府という言葉をづけなければならないと考えた。
表題は編者による。
- ネットラウの手稿では判読できない。
- バクーニンは「著名なフランスの統計学者 Cretet」と書いた。実はベルギーの統計学者、社会学者 A. Quételet (1798-1834) のことである。
- ネットラウの手稿のこの個所には判読しがたい語がいくつもある。
- ネットラウの手稿では、**de** のかわりに **de** を使っている。
- ミクロス・モルナル『第一インターナショナルの衰微』(ジュネーヴ、一九六三年) 参照。
- フランス語版全集第四巻より抜萃、三四一―三五一ページ。表題は編者による。
- ハグでの作爲的な多数派による票決にもとづく決議は、インターナショナルを構成するすべての地方連合によって否認された。すなわち、(一)ジュラ連合のサン・ティエ大会(一八七二年九月十六日)により、(二)デュフォーール法を犯して会合した、とくにフランス各支部の代表二十三名の会議(一八七二年十月)において審議したフランス全支部により、(三)一八七二年八月、リミニでの最初の大以来総務委員会と決裂していたイタリア連合により(一八七二年十二月の通信委員会書信で、(四)ベルギー連合のブリュッセル大会(一八七二年十二月二十五―二十六日)により、(五)スペイン連合のコルドバ大会(一八七二年十二月二十五―三十日)により、(六)アメリカ連合(一八七三年一月十九日、ニューヨーク、スプリングフィールドでの連邦委員会の決議)により、(七)イギリス連合のロンドン大会

- (一八七三年一月二十六日)により、(八)オランダ連合(一八七三年二月十四日、オランダ連合委員会の通信投票結果)によって否認されたのである。ドイツには、法制上反対されていたため、インターナショナルの支部は存在しなかった。インターナショナルはそこでは、総務委員のかたわらに直接加わる個人的加盟者を数えうるにすぎなかった。(ジャム・ギョーム注)
- 一八六四年から一八七二年までロンドンに所在したインターナショナル総務委員会は、ハグ大会の決議によりニューヨークに移転した。マルクスとエンゲルスは、そこでは彼らの意のままに御せる道具が見出せると計算したのであった。(同上)
- ここでは、フランス語訳者がやったように、「マルクシスト」ではなく「マルクシアン」と書くことにした。なぜなら、バクーニンはフランス語で表現するとき、いつもこの用語を用いたからである。
- ブルードンの同様の考えを参照せよ(本書八七―八八ページ)。
- フランス語版『バクーニン全集』第四巻、六二ページ。(「フランス人への手紙」)
- 同上、三八二ページ。(「ラ・リベルテ」誌への手紙)
- 同上、四七六―四七七ページ。(「鞭のドイツ帝国」断片)
- フランス・メーリング「カール・マルクス伝」(一九一八年)。――レーニンも「国家と革命」でマルクスが「宣言」に加えたという「本質的修正」に関する社会民主主義的「日和見主義」の「歪曲」を告発した。
- フランス語版『バクーニン全集』第四巻、三八七ページ。バクーニンのブリュッセル「ラ・リベルテ」誌宛書簡(一

- 場所の名、昔のフリー・メーソンの会堂。(ジャム・ギョーム注)
- Serge Netcheff (1847-1882) ロシアの初期革命家。スイスでバクーニンと相会し、彼を惹きつけ、彼に影響を与え、一時、彼らは、そのテロリスト的かつニヒリスティックな考えを分有した。官憲にひきわたされ、長い囚われのちロシアの牢獄で死んだ。
- 雑誌「ロコル(鐘)」は、ロシアの革命家アレクサンデル・ゲルツェン Alexandre Herzen (1812-1870) によって西欧で刊行された。
- 本書一九二―一九八ページのバリ・コミュニティに関するバクーニンの文書を見よ。
- Pierre Lavroff (1823-1900) 反国家的革命家となった数学教授、シベリアから脱走してパリに來たり、コミュニティに共感、ついでスイス、その後ロンドンに住み、最後にはパリに戻り、そこで死んだ。
- ネチャーエフは、一八七二年八月十四日チューリッヒで捕えられた。彼は一八七二年十月二十七日にスイスからロシアに引き渡された。(ジャム・ギョーム注)
- Jean-Georges Bocarius (1818-1889) ドイツの仕立職人、共產主義者同盟の一員、のち一八六四年以降はロンドンでインターナショナルの一員、一八六七年から一八七一年まで総務委員会書記、一八七二年ハグ分裂大会のさいマルクスと別れ、アナキストではないけれども、「反強権主義」インターナショナルに加わった。――Hermann Jung (1805-1870) ロンドン定住のスイスの時計職人、マルクスの友人、インターナショナル総務委員会の会計係。
- ブランキストたちもまた、ハグ大会で彼らを裏切ったこ

- とを非難して、九月六日以後マルクスと訣別した。(ジャム・ギョーム注)
- Carlo Cafiero (1846-1892) イタリアのアナキスト、初めマルクスの友人、ついでバクーニンの門下となり、さいごにはクロボトキン、エリゼ・ルクリュ等々とともにリベルテール共產主義者となる。本書二七〇―二七五ページ参照。
- 表題は編者のもの。「バリ・コミュニティと国家の観念」より抜萃。仏語版全集第四巻、二四八―二五二ページ。(訳文は江口幹訳による。「バクーニン」三二書房)
- それはまた、スラヴ民衆の本質的に非政治的な本能によって受け入れられているし、これからもずっとより以上に受け入れられるであろう(バクーニン注)。
- バクーニンの手稿「鞭のドイツ帝国」(一八七一年)より抜萃。仏語版全集第一巻、二七五、二七七―二七八、二八一、二八七―二八八、三四一―三四三ページ。
- この副題は編者による。
- Max Nettlau (1854-1944) ウィーン生まれ、国籍はドイツ、アナキズムの倦むことを知らぬ歴史家、史料研究家、多数の著作・論集など。とくにバクーニンの記念碑的伝記の冗漫博識な著述者。
- 「第一インターナショナル」(フランス科学院、一九六八年、二八、三三三、三三六、三四九ページにおける A・レーニンと A・ロマンとの対談)
- H・E・カミンズ「バクーニン・一革命家の生涯」(一九三八年)二二三、二二四ページ。
- マックス・ネットラウは、その手稿「バクーニン伝」からこのテキストを筆写するさい、指導者と一人(原文ママ)

- 八七二年十月五日付)。
同上、三七二ページ。
- 43 42 ジャム・ギヨーム『インターナショナルの想い出』(一九〇七年、第二巻)一九二二ページ。(本書は一九七〇年二巻で復刻された訳者)
- 44 アルトゥール・レーニン『ロシア革命におけるマルクス主義とアナキズム』『ディ・インターナツィオナール』誌(ベルリン、一九二九年)
- 45 カール・マルクス『社会主義倫理選集』マクシミリアン・ルベル編集、一九四八年、序文、注4参照。
- 46 『パリ・コミューンと国家の観念』より抜萃。(訳文は江口幹訳による)
- 47 『フランスの内乱』(La Guerre civile en France, 1871)より抜萃。
- 48 これについては後出の、コミューンの代議制度に関するクロボトキンの批判を見よ(二八九―二九〇ページ)。
- 49 これについては後出の、中世の自由都市(コミューン)に関するクロボトキンの文書を見よ(二七八―二八六ページ)。
- 50 教会区評議会(英国国教会で一般事務をつかさどる)。
- 51 『協同組合について』『エガリテ』誌(ジュネーヴ、一八六九年九月二十一日)より抜萃。
- 52 一八七二年一月三日付、ロドヴィコ・ナブルツツィへの手紙より抜萃。表題は編者による。

直接行動と絶対自由主義的建設への予想について

バクニンの弟子および後継者たち、すなわちジャム・ギヨーム、セザル・ド・パーブ、ジュラ連合の人々、ビョートル・クロボトキンとともに、われわれは、無政府主義社会の建設計画を体系的に述べる段階へ入ることになる。

これら先駆者たちの著作の上澄みを取り、また引き延ばすことによって、いまやアナキズムは、いわば第二期の息を吹くことになり、プロレタリア革命勝利の翌日の、将来社会組織の骨組を細部にわたり、かつ可能なかぎり正確に作成しようとする。こうした予想をえがくことを、マルクスと彼のいわゆる「科学的社会主义」派は、「ユートピア的」とよぶ社会主义から自らを隔てようとする考慮にとりつかれて、たいていは拒んでいる。読者がここに見出すものは、文学的生气や天分では確かに前に見たものに劣るであろう。だが、二十世紀後半の今、社会主義建設のつぎならぬはめに直面していることを知るわれわれとしては、これから読もうとする諸社会計画の中から、もはや先駆者の構想におけるように、噴き出る衝撃的な観念ではなく、たぶんそれほど熱情的でないが、確固たる具体的材料を汲

みとることができる。それら材料は、二十世紀のフランスおよびスペインのアナルコ・サンジャリストたちによって大いに有効に用いられたあとをうけて、今世紀後半におけるわれわれの世界再建の助けとなることが可能なのである。

冒頭に、以下のものの序言として、第一インターナショナル・バーゼル大会において、パリ建築労働組合同盟代表、指物師ジャン・ルイ・バンディが、一八六九年十一月に提出した報告の抜萃を挙げることにする。バンディは、本章の初めに登場する社会的予想論者たちの先駆けである。彼は、実際に二重の連合体、政府の廃絶と資金制度の廃止とを必然的帰結とする、コミューンの連合体と労働組合の連合体との展望を描いている。

……われわれは労働者の間に二つの方式の集団を考ええている。まず、同じ場所に住む労働者に日常の諸関係を保持することを可能にする地域的集団と、次には異なる地域、流域、地方等々の間の集団である。